Ａ－１　学校研究

１　本校の実態

本校は、金沢の真ん中にあり、そして地域の真ん中に学校がある。明治５年に学制が敷かれた折「壱番小学校」と命名された所以である。地域は、加賀藩の仏具や和菓子、加賀友禅などの文化を創出し、加賀藩の産業を支えてきた。今も校下には、古きよき伝統文化が息づき、今日にまで伝承されている。また、決して広いとは言えない校下には、平安から鎌倉時代の全宗派５２ヶ寺という他に例をみない地域でもある。地域には、地域の宝である子どもを学校とともに育てようとする気風が根づき、住民は、温かいまなざしで子ども達の成長を見守り続けている。

このような地域環境にあって、子ども達は、褒めれば力を発揮する、注意すれば改めるなど、素直な子が多い。反面、人に頼ったり、自ら進んで考えて行動したりするという主体性・積極性に欠けたり、基礎的・基本的な知識・技能及び学び方（以下、**基礎学力**という）の習得状況に個人差が見られるなど、学校は、生徒指導面、学力面において労を要している。

本校の学力等の課題は、全国学力・学習状況調査結果及び学校評価結果分析から、次のことが言える。

(1)　基礎学力の習得状況に個人差があり、しかもその差は大きい。
(2)　自分の考えを相手に伝えたり、友達の考えを受けたりして、互いにつなぎながら学び合ったり、高め合ったりしていく関わり合いの学習が成立しにくい。
(3)　文章で表現する力や読解を伴う記述する力が不足している。
(4)　予想や仮説に基づいて推論する問題解決能力が不十分である。

以上の課題等を洗い出し、その解決策を整理したのが下表である。

	課　　題	考えられる手だて等
基礎学力に関すること	・習得に個人差が大きい ・学び方を知らない	・基礎学力の徹底を図る ・宿題を徹底する ・ノートの使い方等を揃える
表現力に関すること	・言語表現能力が稚拙 ・語彙力が不足 ・読み取りが弱い ・書くことが苦手	・「話型表」を活用する ・語彙を増やす ・辞書を活用する ・読書活動を推進・奨励する ・グラフ等の読み方を指導する ・ノートの書き方、メモの取り方等を指導する ・作文、感想文等を多く書かせる
思考力・判断力等に関すること	・思考力・判断力が不十分 ・課題発見能力が不足 ・事実読みに慣れていない	・問題解決型の授業を念頭にメリハリのある授業を展開する ・体験的活動や操作活動を授業に取り込む ・事実と考えを区別したノートづくりを指導する

２　研究主題

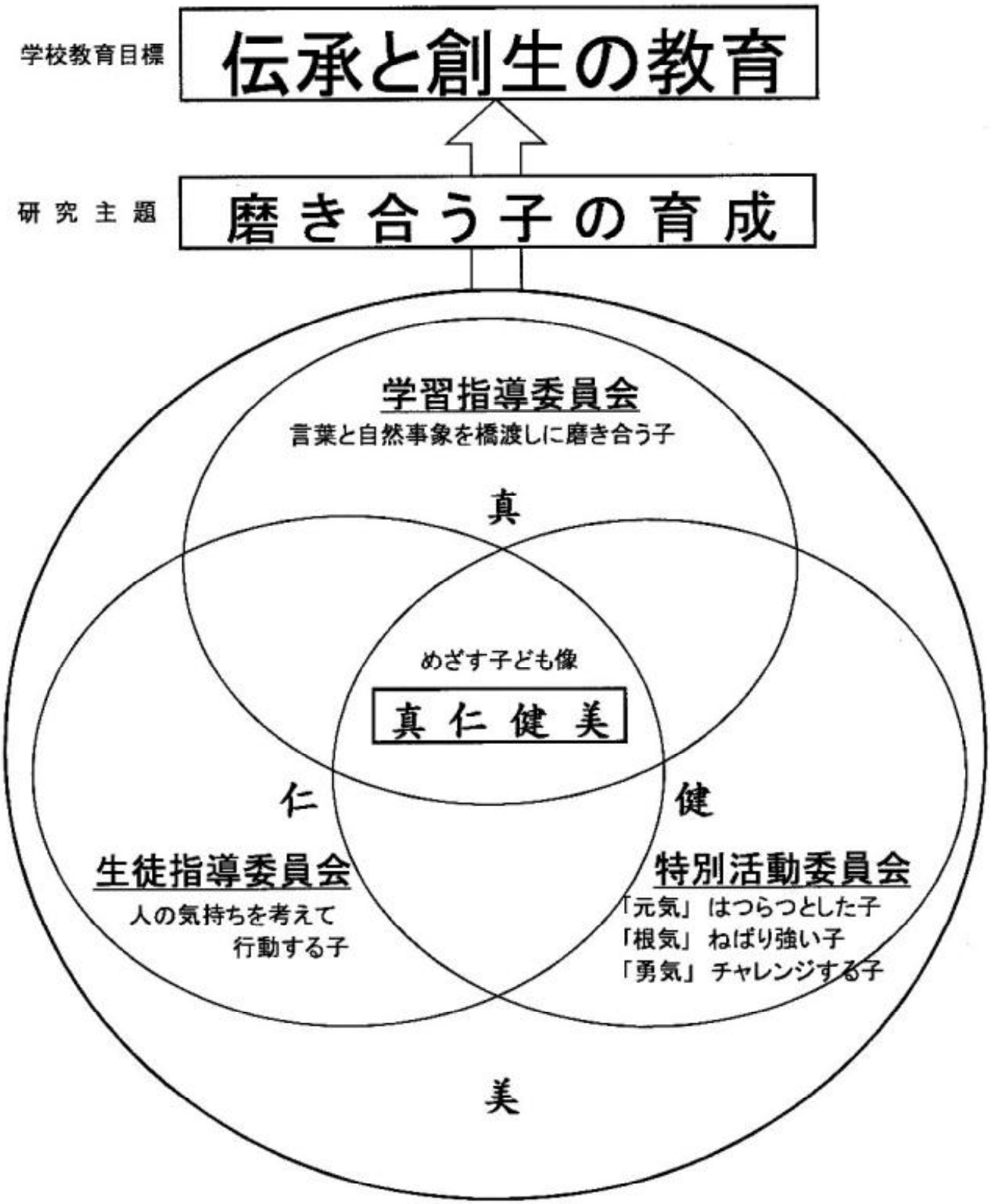
本校では、財産である校下の伝統、校風及び本校で蓄積された教育課程を今現在に継承し、そして未来につなぐため、学校教育目標に「伝承と創生の教育」を掲げた。

また、修養すべき人の価値を「真」「仁」「健」「美」とし、その４価値を教師と子どもがともにめざすこととした。

これらを受け、学び合い、高め合い、深め合う最高位の姿を「磨く」とし、研究主題を「磨き合う子の育成」とした。

３　研究組織

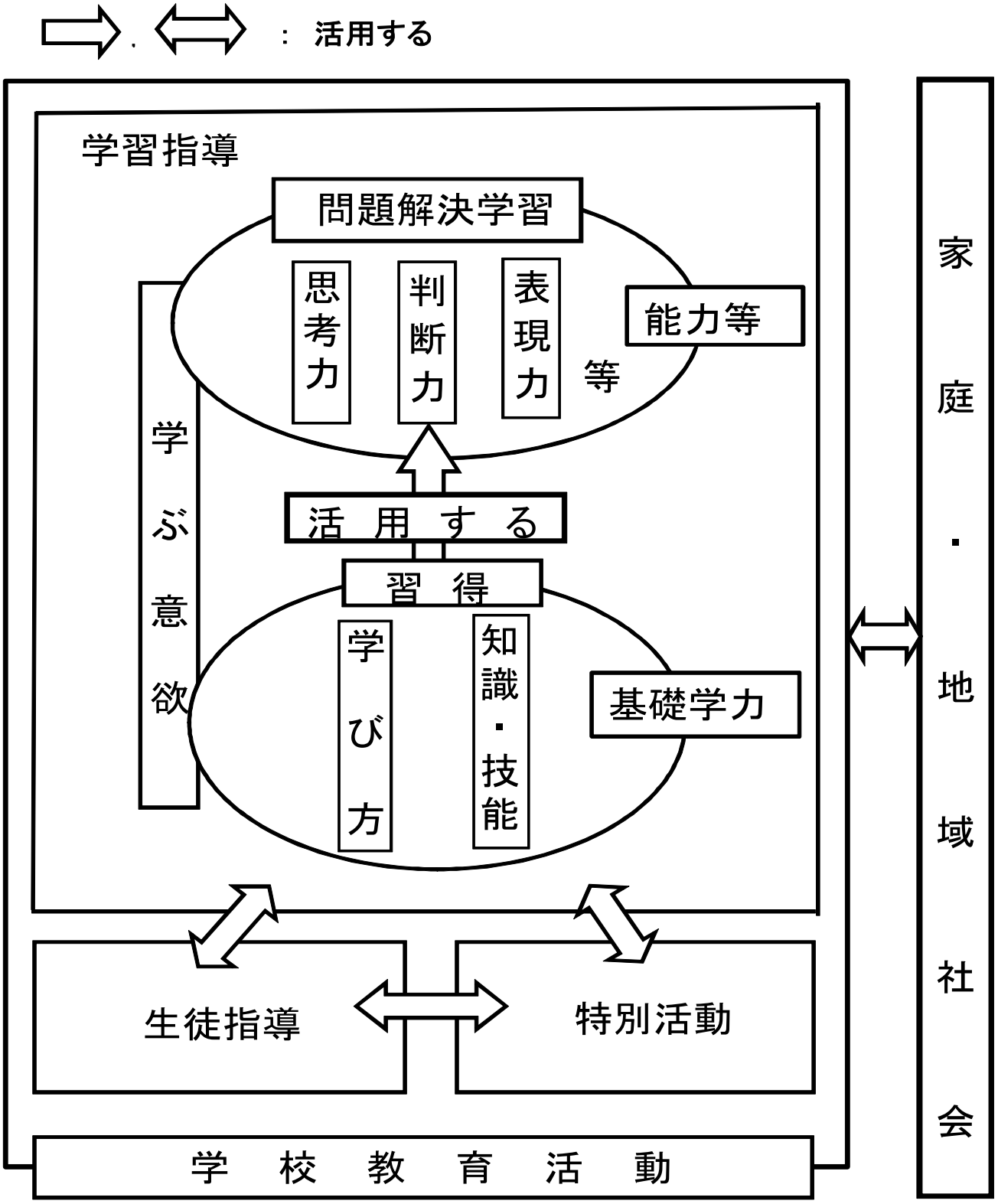
研究主題に迫るため、学校の教育活動全体を三委員会からアプローチし、子どもを体系的に育てていく。



４　「活用する」の捉え

平成２１年度本モデル事業では、学習指導委員会を中心に紹介する。

本校では「活用する」を「基礎学力を習得させ、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力（以下、**能力等**という）を培うこと」と捉えている。習得された基礎学力が次時の学習や学校生活の場で活かされたり、家庭や地域の場で言動や表情に現れたりした時「活用された」と捉らえる。



５　研究計画

基礎学力の習得と能力等の育成の両輪で研究を進める。

このため、授業は、指導と評価の一体化、本時のねらいと評価規準の一体化を図り、４観点に沿った「メリハリのある」授業を展開する。

まず、基礎学力の習得については、３本柱、朝の「野町習熟タイム」、「放課後学習教室」、「家庭学習の励行」に加え、知識・理解、技能等の授業は、「教える」、繰り返す、体験的活動で理解させるなど、わかる喜びを体感させる展開とする。

一方、基礎学力を活用して、子どもの能力等を培う授業は、子ども主体の「考えさせる」問題解決学習を展開し、磨き合う喜びを実感させる。すなわち、基礎学力を育む授業展開とこれらを活用して育む思考力等のそれとは形態は異なる。

また、「磨き合う子」を育成するため、本校では教科等を焦点化して年次ごと計画的に教育課程を編成・改訂し続ける。

<table>
<tr><td rowspan="2">年　度</td><td colspan="3">金沢・野町スタンダード編成計画</td></tr>
<tr><td>窓　口</td><td colspan="2">その他</td></tr>
<tr><td>Ｈ２０年度</td><td>国語科野町スタンダードを構築</td><td rowspan="3">算数科野町スタンダードを構築（道徳、音楽科、図工科、体育科等の教科及び道徳等を見直す）</td><td rowspan="3">地域に生かされ、地域を活かす生活科、総合的な学習を構築</td></tr>
<tr><td>Ｈ２１年度</td><td>理科野町スタンダードを構築</td></tr>
<tr><td>Ｈ２２年度</td><td>社会科野町スタンダードを構築</td></tr>
<tr><td>Ｈ２３年度
↓</td><td colspan="3">Ｈ２３年度以降は、同サイクルで教育課程の見直しをかけ、再構築を図る</td></tr>
</table>

本年度は、昨年度の国語科の研究を踏まえ、理科、生活科に焦点化し、学習でめざす子ども像を**「言葉と自然事象を橋渡しに磨き合う子」**とする。

６　研究の内容

(1)　平成２１年度研究の重点

研究の重点を以下の三点に絞り、下表のような具体的手だてで取り組む。

①　理科、生活科における基礎学力の習得及び指導法について。

②　基礎学力を活用し、能力等を育むための問題解決学習のあり方について。

③　野町スタンダードの構築をはかる。

	研究の重点	具体的手だて・取組等
①	理科、生活科を中心とする基礎学力の習得及び指導法	○基礎学力の明確化 ・科学用語 ・科学的な知識及び科学的概念 ・器具の仕組みとその使い方 ・理科室の使い方、実験観察の学び方及び理科学習の進め方等の学び方 ・ノート、レポートのまとめ方　等
②	能力等を育むための問題解決学習のあり方	○単元構成における評価規準の明確化と「磨き合う場」の設定 ○理科・生活科の指導法及び展開法の明確化 ・学習問題及び学習課題の設定 ・主な発問や問い返し ・表現方法 ・話型の活用　等
	野町スタンダードの構築	○発達段階を意識した教育課程の構築

③		○問題解決学習の系統表の作成 ・３年　比較 ・４年　関係つけ ・５年　条件 ・６年　推論　　等

※　国語科で習得した基礎学力を他教科に活用する。

(2) 具体的取組

本校の学力等における課題の洗い出し及びその解決策を以下に具体化して取組んでいる。

①　基礎学力に関すること

ア　「野町習熟タイム」の充実

基礎学力の習得を図るため、「野町習熟タイム」を充実する。

・時　間　朝の８時１５分から８時３５分　２０分間
・体　制　担任と校長、教頭、級外が関わる複数体制

取組の具体

・Ｈ２１学力テストの分析をもとに、一人一人の子どもの実態を把握。
・学期ごとに、学習の習熟度や取り組み方について評価。
・一人一人の子どもの進捗状況は、個人カードに記録させ、担任が把握。
　単元末には、個人カードの記録やテストの結果をもとに評価し、短いスパンで、本人の努力を認めたり、励ましたりする。
・計算については、制限時間によって「習熟」「熟練」「熟達」を設けて、２月に成績優秀者を褒め、全校朝礼で学校長より認定証を渡す。
・漢字についても、１年から６年までの全漢字を全学年で取り組み、成績優秀者を褒め、全校朝礼で学校長より認定証を渡す。
・その他、詩の朗読・暗誦を通して言語能力を育成する。

イ　「放課後学習教室」の実施

「野町習熟タイム」等においても習得できない子どもについては、月・水・金曜日に「放課後学習教室」を実施する。

ア　時間等　低学年　～１５：４５　中・高学年　～１６：３０
イ　教科等　全ての教科等
ウ　方　法　学級担任による子どもの認定・選考と保護者の承諾
エ　体　制　管理職、少人数担当、保護者及び学生ボランティア

取組の具体

・毎月月末に、定着度をみるテストを行い、基準を満たすとき修了とみなす。

ウ　「家庭学習」の取組

学習習慣を確立し、教科等学習の子どもの積極的な参画を促すため、保護者への啓発も含め「家庭学習」への取り組みを強化する。

取組の具体

・家庭学習（最低１５分×学年）の習慣化
・毎日の漢字・音読・計算の復習
・頑張っている姿を教師、親が激励

②　表現力に関すること

ア　「話型表」の活用

学びの中から児童が発する磨き合う活きた話型等を話型表に掲げ表現力（コミュニケーション力）をつける。

取組の具体

・前年度の子ども達の話型を教師が把握
・子どもが使った独り言やつぶやき等を話型表に載せ、逐次更新

イ　語彙力の育成

取組の具体

・全学年、国語辞典や漢和辞典を使う機会の設定
・国語科以外の教科の学習においても国語辞典や漢和辞典を常備

ウ　語彙や豊かな表現力の育成

語彙を増やし表現力を磨き、コミュニケーション力を高めるため、以下の取り組みを行う。

取組の具体

・「マイ・ブック・バッグ」を机横に常備
・給食、授業時間の隙間時間による読書活動
・野町習熟タイムにおける名文・古文等の暗誦
・各季節ごとの全校俳句作り「今季の芭蕉さん」
・重点的にグラフの読み取り指導

エ　「学びノート」「レポート」の指導

生きたノート、活かされたレポートを作成できるようにするため、書き方等を指導する。

取組の具体

・観察・実験ノート、レポート等の作成の仕方、メモ取りの指導

オ　思考と表現の一体化の実施

思考力と表現力をつけるために、子どもの考えをいかに表現させていくか、全体の場でどのように周知させ、考察させていくかの実践検証を行う。

取組の具体

・考えの書かせ方（文、図、絵、モデル図等）
・全体の場での広め方

カ　「あんずっ子」発表会とユネスコスクールの実践公開

・地域素材の見直しと社会科との関連の明確化

③ 基礎学力の活用・能力等の育成について（思考力・判断力に関すること）

ア　「メリハリのある授業」の実施

習得した基礎学力を活用して、思考力・判断力、問題解決能力等を育成するため、問題解決学習を展開する。

取組の具体

・週案に評価規準の４観点の明記
・評価規準の４観点を踏まえた「メリハリのある授業」について協議・研修
・板書案の作成に基づく授業展開

イ　「ぶらり参観」の実施

教師の授業力及び指導力を向上させるため、互いに授業を見合う「ぶらり参観」を実施する。

取組の具体

・職員室に週案を掲示し、いつでも参観できる体制の整備
・授業評価観点表明示のもと、管理職等による月１回の授業参観と面談の実施

ウ　「かけこみ相談室」の実施

授業等の悩み、校外研修の還元等、自主研修を実施する。

取組の具体

・職員室内のコーナーに相談内容等を記入・掲示
・内容は、学習問題、発問、板書、児童理解、教材の悩みごと等

7　その他の取組

実力テストの実施

子どもの学力の伸び具合及び傾向を把握するため、実力テストを実施。
・時　期　１月
・教科等　国語、社会、算数、理科の４教科

取組の具体

・４月に知能検査を実施。(2 年に１回ー平成 20 年度、22 年度に実施)
・夏季休業７月に３者面談を開催し、学力等について確認。
・１月の実力テストの結果をもとに、１月の保護者面談資料に活用。
・実力テストの結果をもとに、1月からの学習を補強。

8　成果の普及に関する取組

(1)　公開研究発表会の開催

平成２１年１０月２１日（水）午前８時　～　午後４時３０分

(2)　あんずっ子発表会（生活科・総合）の開催

平成２１年１２月２日（水）午前９時～１１時５０分

(3)　フリー参観の実施

学校便りを全戸（１９００戸）に配布するとともに、年中公開「フリー参観」を実施。

(4)　報告書の作成

研究成果については、三委員会の取り組みも含めて主だったところに発信。

(5)　その他　研究経過・成果のインターネットによる公開

インターネット「金沢市立野町小学校」「ほぼにち」にて研究経過及び成果を公開。

9　これまでの歩みと成果

(1)　学びの作法

学習の構えとして大切にしたい「聴く・話す・書く」ことの作法について共通理解し、教室前面に掲示し、全校で指導していった。

(2)　磨き合う姿に迫るために

「磨き合う姿とはどんな姿か」問題解決型の授業において求める子ども達の姿について全体で話し合い、整理していった。また「ねらいに迫るために、教師は子どもをどう支えるか」を確認し、学習問題・発問等がいかに大切かを確認していった。

(3)　国語科一人学習の仕方

学び方を教え、それを習得して自分の力で学習を進められるよう、一人学習のあり方を検討し、実践した。発達段階に応じて説明文と物語文の一人学習の仕方を全体で共通理解し、学年が変わっても、教師が変わっても同じ学び方を行う。

(4)　理科の観察・実験の進め方

理科の学び方を知り、それを一人一人のレポートに発展させることも鑑み、子ども達に配布し、理科室に掲示した。

(5)　ノート・レポートの書き方（国語科・理科）

思考を深め、学び方を次時に活用できるようにするためには、ノート指導が鍵を握ると

考えた。そこで、どの学年、どの教科にも共通して使えるようなノート指導を全校で取り組んだ。また、事実と考えを分けて書く理科レポートの書き方についても高学年を中心に取り組み始めた。

(6)　話型

互いに磨き合う子を育成するためには、言葉と言葉のキャッチボールが必要である。話型は単なる型ではあるが、磨き合うための重要な手段と捉え、子ども達が授業で発する自然な言葉を教師が鋭くキャッチし、話型として教室前面に位置づけるようにした。

(7)　研究授業（国語科、理科、生活科）から見えてきたこと

昨年度の実践から説明文における習得することや活用する場面が明確になった。また、今年度の実践から、理科、生活科の授業において習得させたい用語や技能、さらに大切にしたい科学的なものの見方・考え方などが明らかになった。概念や内容の系統性も見え、それを意識して授業を進めるようになってきた。

(8)　単元イメージ

理科の授業実践後に、再度単元構成の見直しをはかり、内容区分ごとの表に単元構成が分かるイメージ図を書き込んでいった。図示することで、次ごとの実験の様子を明確に示すことができた。

(9)　「広見通信」

事前研で話し合われたことや研究授業を参観するにあたっての参観視点や授業整理会ではっきりしたことをまとめたもの。これによって職員全体の共通理解が図られ、次回の研究授業での課題が明確になった。そして、研究の積み重ねがされていった。

(10)　「ぶらり参観」

教師が他の教師の授業を参観し、互いに磨き合う場を設けた。困った点もぶらり参観で教えてもらえる利点がある。

児童が他のクラスを参観することで、めざす授業像がはっきりしたり、参観される側もより頑張ろうという意欲付けにつながった。

(11)　事前の模擬授業

本時の問題点や板書の効果的な仕方、切り返しの仕方などを互いに教え合った。教師の授業力向上が図られ、事後研の話し合いが深まっていった。

(12)　「かけこみ野町塾」

授業でうまくいかなかった点を再度検証し、次時はどう手立てを打っていけば子どもに力が付けられたのかを話し合った。悩んでいた教師自身が元気になるよい機会となった。

(13)　ESDに関わる生活科・総合的な学習の時間について

地域に生かされ、地域を活かす生活科、総合的な学習の時間のカリキュラムの構築をはかった。なお、年間計画については逐次、見直しをはかっている。